宮沢賢治が晩年を捧げた東北砕石工場のテクノスケープとしての保存の提案と保存手法

岩手大学　学生会員　○盛川　聖峰
岩手大学　フェロー　安藤　昭
岩手大学　正会員　赤谷　隆一
岩手大学　学生会員　泉山　翔平

1. はじめに

都市部と地方部において格差社会が広がる中で、地方部では少子高齢化、都市部への人口の流出、地域経済及び地場産業の衰退などの様々な問題が浮かび上がっている。岩手県内の各市町村においてもこれらの問題に直面し、問題を解決するべく公共施設等の建設や観光振興による街の賑わいの取り戻し、企業の誘致による雇用創出など様々な取り組みがなされている。しかし、その多くはその場しのぎの解決策であり将来にわたって展望が開けているわけではない。地域振興とはその町に育ち、生活を営む人々が、地元を知り、地元を愛し、町を盛り上げる機運を高まらせることが大切なのではないであろうか。

そこで、本研究において岩手県一関市東山を対象とし近年、新たな観点として評価されているテクノスケープからのアプローチを行い、地元住民の学習や自然、文化、歴史遺産の保護を謳う、エコミュージアムの導入と保存を提起する。

２．岩手県一関市東山の概要

岩手県一関市東山は、人口 8,163 人（2005 年現在）、面積 87.72㎢、岩手県の南部に位置し、町の中心には砂鉄川が流れる。2005 年に、旧東山町は一関市と合併し、新たな一関市となった。

町は石灰岩質の山に囲まれ古くから石灰の町として知られ、宮沢賢治が晩年を石灰肥料の普及のために尽くした東北砕石工場（図 1）がある町でもある。石灰岩質の山は切り出しが行われ町の眼前には岩肌むき出しの山々が広がり、町中には三菱マテリアル工場等の巨大プラントが立地する。

その光景とは逆に東山には猊鼻渓や唐梅館、幽玄洞等の自然遺産の名勝が数多く存在し、官公夫人の墓、石と賢治のミュージアム等の観光資源に富み、県内有数の観光地としても有名である。また、奥州藤原三代を支えた金鉱山を有し、金売吉治や菅公等の歴史上の重要人物の縁の地として歴史もある。

しかし､東山町は1996年の観光客入れ込み数356,222人をピークに観光客減少の一途をたどっている。それとともに町内の少子高齢化も進み、伝統芸能や東山和紙、紫雲石硯等の地場産業の衰退と後継者不足、観光施設の老朽化等が問題となっている。そんな中、まだ決定はしていないものの隣町の平泉の中尊寺金色堂の世界遺産登録による観光客増加が見込まれ、東山にもその観光客の流入が予想され、明るい兆しが見え始めているところである。

図 1

３．テクノスケープからのアプローチ

近年、世界各地において「産業景観」＝「テクノスケープ」がさまざまな観点から注目を浴び、元来の形成意図とはかけ離れた「美の対象」として価値を見出す試みが行われている。その価値評価も時代により異なり、戦後高度経済成長期までは「近代化の記号」としてテクノスケープを礼賛する風潮があった。その後、公害問題の顕在化によって意味はネガティブなものへと転換し、悪玉と化したテクノスケープはその後しばらく人々の意識から隠蔽されるべき存在となった。しかし、近年、私たちはテクノスケープの持つ特徴的な形態やその醸し出す独自の雰囲気に気づき、そこに現

代人は昔見た何かを欲しているのかもしれない。それは幼年期に形成される心象風景、原風景であるのかもしれない。

東山においては東北砕石工場が先駆けとなり1924年には石灰産業が成立している。その後、第二、第三の石灰工場が建っていった。つまり、現在、東山に暮らす住民のほとんどが生まれた時からこの石灰を切り出した山々と工場群を見て育ってきたことになる。このことにより東山の石灰の工場群は東山や東山近隣住民の原風景ととることもできる。また、東山を訪れる観光客は通常、観光客は一関市方面から県道19号を通り東山に入る直前に新狭山トンネルをくぐらなければならない。川端康成の小説「雪国」の冒頭、「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」ではないが、それを彷彿させるかのごとくトンネルを抜けると眼前には岩肌むき出しの切り出された山々が広がり、やがて旧東北砕石工場をはじめとする工場群がその視界を奪う(図2)。観光客のほとんどはその光景に驚くに違いない。なにせ、国の名勝、日本百景、猊鼻渓の町である。さぞかし自然が豊かで、清流が流れ、静寂に包まれた町をイメージしてくるに違いない。

東山は自然遺産「猊鼻渓」と産業遺産「石灰の町」と本来相反するものが混在する町なのである。このギャップは必ずや現代人の心をつかむであろう。

図2

４．エコミュージアムとしての保存法

エコミュージアムの基本条件は博物館であることであり、遺産の保存、調査研究、遺産の展示および教育の普及等、博物館としての基本的な機能を満たすものである。形態的特徴として地域遺産の現地保存であり、この現地保存される地域遺産が通常の博物館の展示品に相当する。手法的特徴として地域住民の主体的参加であり、自治体職員と博物館スタッフと共同して地域遺産の保全にあたる。これらの要素を兼ね備えた部分にエコミュージアムの概念が成立している（図3)。

2007年9月～2008年1月にかけて5回にわたって東山の住民代表と東山長坂地区デザイン検討会を開いた。この会において、エコミュージアムによる町興しと自然遺産、文化遺産、産業遺産の保存を提案した。産業遺産に関しては前項で記したとおり、産業景観＝テクノスケープとしてとりまとめることとした。テクノスケープの保存、整備方針としては2005年施行になった景観法を適用するのが有力な手段だと言える。

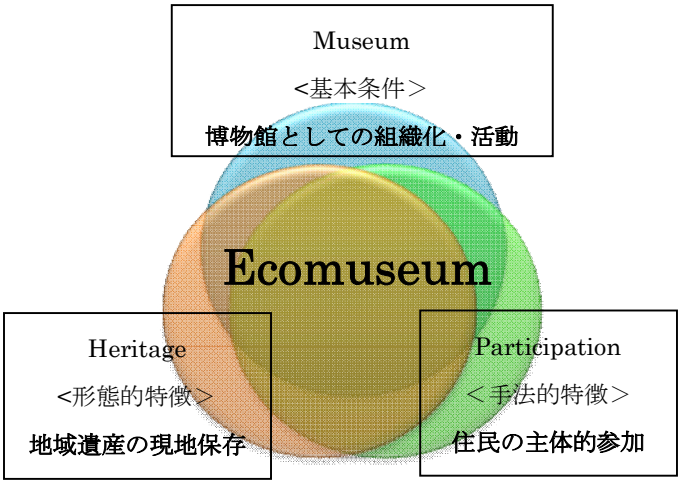

図3

５．終りに

本研究はテクノスケープとエコミュージアムの二本立てとし、岩手県一関市東山にこれを実現するものとする。しかし、前例からいってエコミュージアムの設立までには早くても約10年。テクノスケープとしての確立と景観法による整備も数年を要すると思われる。よって、今後は本研究を叩き台にして、住民と行政主導によるエコミュージアム計画、並びにテクノスケープに関する勉強会、意見交換会を行い、実現にむかいたい。

参考文献

1) 新井重三:「エコミュージアム・理念と活動」 1997年
2) 小笠原崇・安藤昭・赤谷隆一:「遠野市をモデルとしたエコミュージアム計画の展開手法に関する研究」 2005年
3) 岡田昌彰:「日本における産業景観の現況」土木学会 産業景観シンポジウム資料 2007年